

教員になり、「学級通信」を出したことがある方は多いことと思う。私の場合は、初任の小学校勤務1年目から出していた。この学校では、学級通信を出すのが当たり前という感じだった。私はというと、1年目は悪戦苦闘し、年間で20号くらいしか出せなかった。とりあえず出している、まわりの先生方が出しているから仕方なく出しているという状態で中身も恥ずかしいかぎりだった。それでも、4月の1週目に第1号を出し、その後、夏号、秋号、冬号で終わる友人よりはましかと思ったものだった。

今思うと、最初の学校の先生方は、皆さん、ちゃんとしており、あの当時はまだテキトウな性格であった私にとってはとてもよかったのだと思う。中には学級通信を毎日出している先生がいた。毎日、手書きで休み時間などを使って書いていた。私は、そんな先輩の姿を見て「すごいなあ」という思いで憧れの気持ちを抱いていた。

何となく教員1年目が終了し、2年目を迎えるにあたり、さすがの私も「これではいかん」という思いにかられ、ようやく本気で教員を目指すことにした。身分上はすでに教員ではあったのだが。教科指導も大切だが、まずは学級経営ということで、その柱に学級通信を据えることにした。こういってかっこよく聞こえるが、実際には、休み時間に校庭で子どもたちと遊ぶことが柱だったように思う。あの頃の私は、指導力も経験もない。では、自分に何ができるか。それが子どもたちと遊ぶことだった。おかげで毎日クタクタだった。まさに体力勝負だった。

張り切って始めた学級通信だったが、週に1回程度、年間50号しか出せなかった。あの頃の私は、自分が出す学級通信を製本することに憧れていた。日刊で出している先生の学級通信は、りっぱに製本されていた。

何とか週に1回の発行が軌道に乗り、中身もそれなりに伴ってきた10月頃、教頭先生に呼ばれた。「高澤先生、論文でも書いてみっか。学級経営で。学級通信がんばっているようだからな」私は、論文といわれて、ざわっとした。大学4年の1月まで苦しめられた卒業論文の悪夢がよみがえってきたのである。あの頃の私は、教育論文というものを知らず、とりあえず「はい、わかりました」と答えるしかなかった。

教頭先生は、何もわからない私に、ご自分が以前作成したものを使って、章立てやプロットを教えてください、全体のイメージをもたせてくださった。さすがに研究主題や研究仮説くらいの用語は知っていたが、どのようにして書いていくかなどは全くわかっていなかった。この状態から1月まで教頭先生の指導が続くことになる。「高澤先生、研究主題というのは、研究の顔だから大事だ。3つの要素からつくといい。先生の場合は、研究の範囲は～、目指す姿が～、手だて・方法が～だな。明日までに考えてきてみて」こんな感じで、毎日のように宿題が出された。私は、いわれるままにやるしかなかった。

教頭先生の指導は、端的、的確、わかりやすいものだった。最初はよかったのだが、こちらも学期末を迎え時間に余裕がなくなり、論文の半ばを過ぎる頃になると、眠いし、やりたくないという思いが出てきた。しかし、やらないわけにもいかず、とりあえず教頭先生におそるおそる出すだけは出すという時期もあった。そんなときの教頭先生は「高澤先生、何だか文章が疲れているなあ」という言葉をかけてくださるのである。決して怒ったりはしなかった。手を抜いている私は、ただただ申し訳ない気持ちだった。

(次号に続く)